

少年の主張出品作品

今回も逢瀬町の「少年の主張作文コンクール」出品作品と「青少年読書感想文コンクール」出品作品を紹介いたします。

私の大好きな逢瀬町

4年 柳田 莉緒

私には今、とても気になっていることがあります。それは、私の住むこの逢瀬町のごみ処理場のすぐ近くに、たくさんのごみが毎日トラックで運ばれてきていることです。そこには、大きな黒い袋がたくさんギッシリと並べてあるのを見たことがあります。いっぱいになると、どこかに運ばれて、また袋が並べられるのです。私は、お父さんに、「あれは、何？」と聞いたことがあります。お父さんは、「あれは、放射線で汚染された土が入っている袋だと思うよ。」と言って詳しく教えてくれました。2011年3月11日の東日本大震災で、福島第1原子力発電所の事故が起きて、放射性物質が飛び散ったそうです。私は、その時、まだ0才で、何があったか分かりませんでした。定期的に甲状腺の検査を受けています。また、毎日家庭科室では、給食の前に放射性物質が入っていないか検査をしています。放射線が体によくないということが、よくわかりました。でも、私たちが毎日食べている給食は、きちんと検査をしているので、食べても安心だということもわかりました。私のおじいちゃんとおばあちゃんは、家のすぐ近くの畑で、いろいろな野菜やくだものを作っています。私も、時々手伝っています。6月ごろに、とうもろこしや、じゃがいも、トマト、さやいんげん、なす、ピーマンの種を植えました。水くれをやったり、肥料をまいたり、土をかぶせたり、やるのがいっぱいあって、とても大変だなと思いました。この前、私の大好きなスイカととうもろこしをしゅうかくしました。あまくて、とてもおいしかったです。逢瀬町には、私のおじいちゃんやおばあちゃんのように、たくさん野菜やくだものを作っている畑や田んぼがあります。このまま、放射性物質が入った袋が増えてしまったら、逢瀬町のかんきょうが、どうになってしまうのか、とても心配です。また、近年増えているこう水のひがいで、たくさんのごみが出ていることをニュースを見て知りました。増え続けるごみが気になります。放射性物質のごみは、何十年もかかる問題です。水害によるごみは、防ぐことが難しいごみです。しかし、私たちの身近なごみは、みんなの努力と協力で減らすことができます。今年の7月から、レジ袋が有料化されました。正直、不便だなと感じることがあります。でも、マイバッグを準備するだけで、かんたんにごみを減らせることができるので、早速やってみようと思いました。私は社会科で、ごみ処理の方法を学習しました。郡山市は、人口が増えても、人々の努力で、ごみの量が減っていることがわかりました。そこで、逢瀬町のかんきょうを守るために、今、私にできることを考えてみました。まず、ごみの分別をきちんとすることです。ペットボトルや空きかんは、リサイクルすることができます。学校でも、授業参観のたびに、資源物の回収をしています。ペットボトルのキャップは、ワクチンの注射にかわるので、私も学校に持っていきます。次に、好き嫌いせずに、残さないで食べることです。私は学校の給食を、毎日残さないで食べています。生ゴミがへって、食事を作る人もうれしくなるので一石二鳥です。社会科の学習で、ゴミを捨てる時にルールを守らない人もいることを学習しました。私は、一人ひとりの心がけで、自然ゆたかな逢瀬町を守ることができると思います。いつまでも私の好きな逢瀬町であってほしいです。今、自分にできることをしっかりとやって、みんなにも呼びかけていきたいです。

【裏面へ】

青少年読書感想文コンクール出品作品

「さっちゃんのまほうのて」を読んで 2年 村田雅衣奈

わたしには、右手も左手もあります。右足も左足もきちんとあります。でも、この本にでてくる、ようち園生のさっちゃんという女の子には、左手のゆびが一本もありません。さっちゃんは、ようち園でおままごとをするのがすきでした。お母さんになりたいさっちゃんはおままごとでお母さんやくをやりたいと思っていました。しかし、お友だちに、「さっちゃんはお母さんにはなれないよ！だって、手のないお母さんなんてへんだもん。」と言われてしまい、つぎの日からようち園に行けなくなってしまいました。わたしは、小学生になっても大人になっても、ゆびがはえてこないさっちゃんのことをとてもかわいそうだと思いました。さっちゃんがようち園に行かなくなって何日かたったある日、さっちゃんの妹が生まれました。赤ちゃんをお父さんとびょういんに見に行きました。その帰りみちにお父さんがさっちゃんに言ったことばに、わたしはとってもかんどうしました。それは、「さちこは、すてきなお母さんになれるぞ。だれにもまけないお母さんになれるぞ。それには、さちこ、こうしてさちこと手をつないで歩いていると、とってもふしぎな力がさちこの手からやってきて、お父さんの体いっぱいになるんだ。さちこの手はまるでまほうの手だね。」ということばです。このことばのおかげで、さっちゃんはつぎの日からようち園に行くことができるようになったのです。わたしがすんでいるせかいには、さっちゃんのような手のふじゆうな人がたくさんいます。そんな人たちに、さっちゃんのお父さんみたいに、やさしいことばをかけてあげられる人にわたしはなりたくて、この本を読んで思いました。

「プラスチック惑星・地球」を読んで 3年 宗形 祐

ぼくが、この本をえらんだ理由は、地球とプラスチックの関係って何だろう、と思ったからです。今年から、レジぶくろを、お金を出して買うことになりました。これも何か関係があるのか知りたかったからです。プラスチックはもともと自然の中にはなく、人間が作り出した物でした。今ではほとんどが石油や天然ガスで作られているそうです。自分たちの周りにプラスチックの物が増えているように感じていましたが、この本を読んで、想像をはるかに上回っていたことにびっくりしました。たとえば、日本人は、500ミリリットルのペットボトルで、平均して2日に1本飲んでいると言われていています。つまり、1年間で180本のペットボトルを使用していることになります。ぼくは、今年の夏は暑かったので、1日に2本飲むこともありました。プラスチックせい品を、こんなにもしょうひしているなんておどろきました。祖母から聞いた話では、昔、とうふを買いに行く時には、入れ物を持って行ったので、パッケージも必要ないし、ごみも出なかったそうです。今では、スーパーに行けば、いろいろな物が買えるようになってべんりになったけれど、それだけごみも多くなったと教えてくれました。この本の中では、いろいろな動物たちが、いろいろな所に行ってお腹をさがす場面があります。けれども、食べ物だと思って近づくと、そのほとんどがプラスチックだということです。お腹をすかした動物たちは、そのプラスチックを食べてしまいます。また、プラスチックのひもにからまって動けなくなり、死んでしまう動物もいるそうです。この本から、レジぶくろなどのプラスチックが原因でたくさん動物たちが死んでしまっていることを知りました。ぼくは、人間がポイ捨てしたプラスチックを食べて死んでしまった動物を見て、とてもかわいそうで、悲しくなり、強く心にのこりました。この本を読んで、ぼくたちの通学路に落ちているごみやプラスチックを、動物たちが食べているところをそうぞうすると、ゾクッとします。ぼくは、少しでもプラスチックをへらして、動物たちが安全にくらせるかんきょうにしたいと強く思いました。たしかにプラスチックはべんりです。しかし、ぼくたち人間が、まちがった使い方をすることで、動物たちの生活をおびやかして、こわしているのです。そしてプラスチックを食べた動物を、人間が食べれば、自分たちにもひがいが出ることになります。ぼくは、これから必ずマイバッグを持って買い物に行きます。まちでできるだけごみを出さないようにリサイクルなどしたいと思います。まずは、自分から動物や地球にやさしい生活をしようと思います。いつまでも美しい地球を守るために。

